

# 次世代リーダーの誕生2

(株)照沼勝一商店 代表 照沼勝浩 (第2話)

## 株式投資での失敗を機に本業に専念 その矢先に原子力の町に起きた試練

「後継者不足」や「農業人口の減少」とは関係なく、新しい経営感覚で農業ビジネスの確立を目指す若き経営者たちが確実に育ちつつある。次世代の農業をリードする彼らが就業当時を思い、どう経営観を確立していったかを、数回の連載の中で語っていく。



【照沼勝浩】  
1962年茨城県生まれ。県立東海高校卒業と同時に、(株)照沼商店の仕事に従事するようになる。2004年9月に代表取締役社長に就任。  
【(株)照沼勝一商店】  
1978年創業。現在、70haでサツマイモを栽培する農業法人であり、地元の農家からサツマイモ、干しイモを仕入れ、市場や量販店、生協などに販売する産地卸業者でもある。2003年度の売上は5億3千万円。2002年に農業生産法人の資格を取得。

(株)照沼勝一商店は干しイモ、サツマイモの生産および産地卸を業とする。照沼勝浩は、父、勝一が興した同社に、高校卒業と同時に入社。会社の業績は飛躍的に伸びていくが、ワンマン経営に徹する父親に反発を感じ、30歳過ぎて独立を決意。そのための資金稼ぎにと思って、株に手をつけるものの失敗に終わり、あとには3000万円の借金が残った。

からすすめられダイエットも始め、体調も良くなった。「食べ物というのは人間の健康にとって大事なんだということも初めてわかった」

### 原子力の町の産物例と紹介されシェアが激減

失敗を機に、個人として大きな転機を迎えた勝浩だが、それからほどなく、自分の生まれた地域の特殊性をあらためて認識させられる事態に遭遇した。

東海村は言わずと知れた原子力施設の町である。この村に原子力関連施設が初めて出来たのは、勝浩が生まれる以前の1957年。日本原子力研究所東海研究所が設立されて以

来、原子力発電所を始め、さまざまな関連施設が建てられた。

原子力施設の建設を巡って、誘致した自治体と住民の間の確執は今も続く。だが、当時の東海村では貧しさからの脱出の方が重要な課題だった。そして勝浩以降の世代にとっては生まれる前からの現実であり、またそれなりに納得もしていた。

ところが、勝浩は自分の耳に入ってきたある情報に愕然とした。「原子力施設のある東海村で出来た干しイモは危ないらしい」

事の起りは1990年、勝浩が28歳の時だった。建設が始まろうとしていた青森県六ヶ所村の核燃料再

「あの時がまさにどん底だった」  
——借金を抱え、どうすることもできなかつた勝浩は、独立どころか、目の前の借金返済に追われた。私有財産はことごとく処分し、4人の子どものお年玉にと積んでいた貯金まで返済に充てる始末。当然、勝浩自身も自由に使える金などなかった。「でもあれを経験して、人間は本業に精を出さないとダメなんだと思う

ようにもなったし、自然と考え方も謙虚になってきた」という勝浩の頭からは、独立云々という考えは徐々に薄れていった。

それ以前は仕事一筋で人付き合いも苦手だったが、できるだけ多くの人と会おうとするようになり、人当たりも柔らかくなったと言う。飲めなかつた酒もだんだん飲めるようになった。また、体質改善のために人



農業後継者クラブは、風評被害に対して積極的に行動し始めた

処理工場の話題がきっかけとなった。再処理工場は、青森県が1985年に受け入れを認めたものだが、施設の建設を前に、一部住民による反対運動は激しさを増していった。反対派は「施設が出来る所でござらされた農産物も売れなくなる」と主張。これに対し国や青森県は、おせっかいにも照沼商店の事例を持ち出した。「東海村には『雪の華』という干しイモのブランドがあって、全国的にもかなりのシェアを占めている。だから問題はない」とコメントした。

このコメントは新聞紙上にも取り上げられた。その後、反対運動に加わっていた青森県の某生協によって、東海村の干しイモのポイコット

運動が始まった。この頃、照沼商店は大手スーパーとの直接取引が決まっていたが、そのスーパーからもキヤンセルの連絡が入った。青森の卸売市場で60%あった同社のシェアは10%近くまで落ち込んだ。

東海村で事件が起こったのではないにも関わらず、風評被害に見舞われたのだ。

「周りから言われるだけ言われ、それに甘んじているだけでいいのか？」——こう思った勝浩は、農業後継者クラブの三代目会長就任を決めた。

農業後継者クラブとは、地元の農業後継者を育成しようとして行政が旗を降って作ったものだが、それまで表立った活動をしていなかった。だが勝浩は「自ら行動を起こすグループになるう」と考え、会長就任以降、各種のセミナーに組織として参加したり、独自に各分野の専門家を招いて勉強会などを開いたりするようになった。

### 風評被害対策費交付を待っただけでいいの？

そのかきもあって、数年後、東海村ブランドの干しイモのイメージも徐々に回復して行った。ところがほっとしたのも束の間だった。

97年3月、動力炉・核燃料開発事

業団（動燃）東海事業所再処理工場で火災・爆発事故が発生。この事故では、30名以上の作業員が被曝し、事故から数日後には、同村から70km離れたつくば市でも放射能が検出されるなど、茨城県全体に大きな不安をもたらした。

勝浩ら農業後継者クラブのメンバーは、事故の翌日、動燃の職員を呼んで緊急説明会を開いた。自分たちの作った作物や畑が放射能に汚染されたとなれば、風評被害どころか、この地で農業を続けられなくなってしまう。説明会の場で、各地の土壌や作物の放射線や放射能の値を測定することを動燃に約束させた。

その結果、異常を示すデータはどこからも検出されず、勝浩もクラブのメンバーも一様に胸をなでおろした。だが、その後の動燃の後手に回った対応、そしてマスコミの報道によって東海村の農産物は少なからぬ影響を受けていくことになった。

同年5月、事故の報道が冷めやらぬ中、勝浩は農業後継者クラブの存在を地元へ広く知ってもらおうと、Tシャツを作ることを提案した。それを販売することで、自分たちの活動のことが知ってもらおうと同時に、活動に賛同してくれる人を募ろうと思ったのだ。

当初、1万枚を作る予定で、地元

の農協に融資を依頼した。ところが農協から返ってきた答えは「黙っていても、風評被害対策費が下りてくるんだから……」。遠まわしな言い方で断られたのだ。

他の地域での農業と違い、原子力施設の町という特殊性ゆえの苦悩はあるが、じつと我慢すれば人々もいずれば事故のことを忘れる。何も地元の間が波風を立てることなどない——勝浩にもこの考え方が理解できないわけではなかった。

だが、自分が生まれた東海村に、ふるさととして誇りを持っていた。それなのに自分たちから何一つ発信をせず、人々の記憶から薄れるのをひたすら待つことしかできないのか？ 納得できなかった。

結局、Tシャツの作成費は勝浩が立て替えることにし、1枚1000円で5000枚を製作。完売するのはこれから3年後のことだが、イベントなどがあるたびに販売し、結果的に40万円の利益まで出し、それによって「私たちが東海村の農業者です」という趣旨のポスターを作った。

（敬称略。文・青山浩子）

おわびと訂正…前回のキュアリング貯蔵の説明で、「熱処理後は冷蔵庫で保管する」は「熱処理後は低温貯蔵庫で保管」の間違いでした。おわびして訂正します。